

農業改良普及員の普及活動

―その足跡と課題―

内 山 政 照

去る七月初旬私は農林省普及課のあつせんによつて、各二名ずつの農業改良普及員と生活改良普及員の方々と会談する機会をもつことができた。そしてその席上において、披瀝された彼らの苦難に満ちた深刻な体験談をもとにして、普及事業研究に従っている私の観点から今迄の普及事業の足跡を整理分析し、今日の課題とその解法の若干とを示唆し度いと思つたのが本稿となつた。

ここに出席された方々の三年有余にわたるすぐれて熱心な活動の成果が美事なものであつただけに、先んずるもののみが感得し直面し得た問題の広さと深さとが、くつきり浮かび出ているように思われたので、思いついて若干の整理を試みたわけである。

いままでの普及事業はいわば学校を設立するところまでの仕事であつたこと

農業普及事業はアメリカではしばしば〈out of school education〉といわれる。その意味は、学校での教育は――義務教育のはあいにはとくに――いやでもおうでもちゃんと仕度をして時間通り教室に入つて、先生のくるのを待つてゐるもの、すなわち生徒を対象としている。先生はその待つてゐる生徒たちの前にあらわれればよい。ここ

ろが農業普及事業のばあいにはそういう教育の場面を準備しておいてくれるワクがはまつていない。生徒たることを期待されているところの農民は氣に入らなければ座談会に出なくてもちつとも非難されないし、又座談会に出ていても後の方で隣りのひと同志ヒソヒソ噂話をしていても、先生たる普及員からは少しもとがめられはしない。いわば学校という柵の中に入つていないで野放しのままの生徒たちを相手に教育する、というのが農業普及事業のそもそもの始まりであつた。こういう意味で、まことに「out of school」である。

だから例えばいくら一生けん命に 2・4・D の説明をしても、そのまま放り出しておくと直ぐ野放しものの野性がでて忘れてしまふか、或いは「そんなことはおれたちには役に立たない、知つたことぢあない」ということになつてしまふ。

或いはもつと悪いばあいには、普及員の意図が生徒たる農民の野性のままにひき曲げられて逆に解釈されてしまふ例さえないわけではない。例えば、先日三重県で行つた幻燈による普及活動の実験の結果によると、山彦学校の幻燈スライドを観た農民の感想文のなかに、「私たちの村はあんなに貧乏ではないから、幸福だ」とか、藤三郎少年が薪を背負つて山を下りてくるカットにとくに印象づけられたものが、「みんなあんな風に一生けん命働らなくてはならないと思つた」などというのがあつた。これはあのスライドのライト・モチーフ（主題）をそれとして汲みとることができないで、自分たちの自己満足感、あるいはいわゆる「勤労の哲学」を基軸とし、それにもとづいて、一つのカットを解釈し、それで終つていたことを証明している。こういうばあいはなかなか表面にはあらわれ難いけれども、実は案外に多いケースではないかとさえ推測されるのである。

こういう状態のなかで無手勝流で——補助金を前代の農会の技術員のようにもつていれば、このときに、「大を美

味あじそうな飼えさでつるように」農民を誘つて自らのワクの中に追い込むことが比較的容易にできたであらうが、——生徒を探し学校の柵を築き上げてゆくことが、いままでの普及員たち第一の仕事となつたにちがいないのである。そして多くの経験、試行錯誤(trial and error)のち、このためのものとして一おうここに打ち出された方法は次のような要件をもつ事業内容のものであつた。

第一には、多くの普及すべく改善すべき事がらのうちで、「農家にとつていまや最も必要であつて、しかもいま農家の手から最も離れて遠くにあるもの」がこれである。例えばモンペでなくてワンピースが、馬鉞でなくてカルチペーターがこれである。前例については既に私の示したところであるし(拙稿「生活改良普及員活動事例集の書評」、『農業綜合研究』六の三)、後例については、湧井学稿、新農機具の普及技術に関する資料(広島県、昭和二七年、五月刊)に説かれているので(とくにその四頁)、いまここで重ねてのべないことにする。

しかしこういうものは一般に広く多くの農家に共通なものとは云えないばかりである。例えばミシンを使う洋裁のばあいの如く、或いは家畜を使つてする耕起の講習のばあいの如く、ミシンや家畜を有たない農家はここから外れてしまわねばならない。けつきよくこれらの農家は普及事業の最初の対象として拾い上げられないことになる。そこで第二の要件としてあらわれてきたのは、そういう農家の所得とか経営規模とかに比較的關係が薄い事ながら、そういう生産・生活のからまり合つた綱(integrated system)から比較的自由独立でそれだけとり出してでも或る程度可變的なもの、ということだつた。農家の立場からこれをみれば、「それをやるのに安くて直ぐ手出しができて、しかもその効果が目に見えて直ぐ解るもの」という要件である。普及事業が実さいに今までとり上げてきた仕事の大部分は凡そこういう性格の事柄(第一の要件と重なり合つた)であつたと云つてよい。

東畑教授はかつて改良品種の普及がわが国農業のなかで著しい点に着目され、それは「それ自身比較的に独立し孤立的に実さい農業界に入り易い……農業の生産方法、経営方式に特別な異動変化を齎らさなければ実さいの普及が行われな」と云うほどのものではない」からであると説かれた。

（東畑精一稿、日本農業技術の特質、『日本農業の課題』、二二四頁）

例えば、畜力耕起、ハンドトラクターの話ではなくて品種の特性、えらび方、やさしい消毒のし方、新しい肥料の成分、肥料のやり方、換金作物の作り方、どういうものがよいか、等々。

換金作物と云うのはあまり資本（おカネ）が要らないで……だから相當の貧しい農家でも、……直ぐ手が出せてしかもす早く現（あらわ）なまが手に入るという性格のものをその含蓄（おカネ）のなかに含んでいる。例えばリンゴ作りも養蚕も字義通りには「換金」作物にはちがいないが、これを決して農家のひとは換金作物とは言わないのは上に指摘したような性格をもたないからである。

生活改善の方で云えばこのことが「お料理」の講習にあらわれている。毎日の生活・生産そのものに直接規制されることの強い日々の食事ではなく、晴の日に主として客用として使われる――そういう意味で「お」がついているよ（2）
そ行きの「お料理」ならば、誰でもどんな家の娘さんでもお嫁さんでも一おうフライパン一丁と卵と小麦粉さえもつてくれば珍しい形とシャレタ姿のカステラが忽ちにして、（直ぐ効果が見える）でき上るといふ講習には喜んで出掛けてくるだろう。

これに反して例えばカマドの改善がいくらよくても少くとも四〇〇〇円（おカネ）の金がかかるというのではもとでの關係でちよつと手出しの出来兼ねる家もあるし、そんなことをしないでも「私はいまのままで五〇年我慢してきたのだから、ムダなお金を使うな」と姑さんにしかられて出凝るお嫁さんも多からう。いわんや台所・住宅の改造などという大がかりな仕事では広く一般の興味を引きつけることは望めないにちがいない。こうなるとどうしてもカステラ

の作り方というような integrated system から比較的離れた生活内容のものが、「始めて村に入つた生活改良普及員とは何だろう」と好奇の目を光らして傍観している農家たちに向つて、仕事をすすめ、ともかく彼らを生徒としてひきつけるメドとしては適切であり、又その限り有効だつたことは認めなくてはならない。

かくして野放しの生徒たち、農家たちが初めは好奇の目を輝かしつつ、そしてそれに従つてゆけば「今日から役に立つ」「明日もうかる」とことが教えてもらえると期待から、次第に「普及員学校」の柵のなかに入つてきて教室に並んで一おう手を揃えて先生を待つという態勢ができてきたと云つてよい。――もちろんこうした「普及員学校」にすら未だ来られない来ようとしなない農家が数多くあることは否定できないとしても。またこの学校には、生徒が一年生から六年生まで、それぞれちがつた学力と気持とをいだいて来ているように、さまざまな階層と年令、関心とをいだいた農民がひとまとめに含まれているとしても。（そのうちで四-Hクラブ、或いは農事研究会は特殊ないわば模範学級と称してもよいものであつた）。

このことは骨は折れたがとにかく偉大な仕事であつた。いままで他の何者も斧をふるわなかつた処女地に踏みこんで、ともかく農家の間に学ぼうという心の開拓地をきり拓いたことを意味するからである。しかしここで多くの問題が生じてきている。少くとも熱心に今まで四年間なり三年間なりの仕事に身を打ち込んできた普及員たちは、そういう問題にぶつかつていま厚い障壁に直面したように悩んでいる。それはおよそ次のようなことだ。

- (1) この調査の報告は、農林省農業改良局、普及部普及課編、『農民心理に関する調査――幻燈等に対する反応を中心に――』昭和二十七年六月にまとめられた。

- (2) ハレの日、及びこれに対立するケの日については、さしあたり拙稿、『くらしの明暗』『農業朝日』昭和二十七年十二月臨時号を参照せられ度い。

行き詰まりを見つめる

いまここで徒らに立ち停つてゐる代りに、行き詰まりの構造を尋ねることは次の段階への飛躍のための不可欠の準備である。そういう意味から以下若干この問題を分析してみよう。

まず第一に注意しなければならない点は、この行き詰まりの根源の一つがいままでの歩み方自体のなかに潜んでいたということである。つまり上にのべた通り、これまでの普及事業は生産或いは生活の深くからみ合つた綱から比較的離れ得た事柄について強調され、実践されてきたと云う点にかかわる。この限りにおいて、生徒たちは魅惑されて普及員学校の柵のなかに追い入れられたかも知れないが、そこで受ける授業はいわば彼らに甘えた内容のものであつて、彼らの住み生産し生活している日々の根源的な綱には深く触れるものではなかつた。そこを一八〇度転回して自らの根本を省^{おもと}える必要のないことがらであつたからである。ここではいわば回心 (conversion) のきつかけは存在しなかつたからである。

社会学的に表現すれば、これによつて現実の社会圏の交錯 (soziale Kreuzung) が行われず、従つて個人化 (Individualisierung) が結果しなかつたといつてよい。

従つて次のような困難な事態が生じたことも当然の成り行きであらう。

(1) 目的と手段の錯倒 ある生活普及員はその嘆きを次のように語つてゐる。

「料理の講習会も始めは私が問題をそこに見つけ仕事の方針を決めて食生活改善からとり上げて行つたというのではなく、むしろそれを通じて農民が何を考え何を欲しいかなる生活を続けているかという実態をつかみ度かつたので

す。言い換えれば改善すべき問題を正確に把握し改善の方針を立てるための手段として講習会をしてきたのです。しかしそれが現在では目的の如くになつてしまつています。」(静岡県生活改良普及員、安間氏の手記による。『生活改良普及員活動事例集』一七四―五頁。)

改良普及員が農民のなかに入りこみそのなかから彼らの生活の呼吸のリズムとテンポをつかみとろうとする手段としての「お料理」が、一たん農民の中に入つてその中に吸いこまれてしまうと、旧来のリズムとテンポのなかにその全容を没してしまつて、そこで生きそれを目ざして動くようになる。これでは——結果からみると少くとも——旧来のリズムとテンポとに屋上屋を架したに過ぎぬ、「新らしきもの」は少しも附加させ得なかつたとさえ極言できるであろう。農業技術の普及の場面で言えば品種普及、肥料施肥方法に関する普及なども此の部類に属するばあいが多いであろう。ここには普及内容に附与した目的と手段とに対する考え方が普及員と農民との間で全く逆転しているといわねばならぬ。

(2) 模倣普及の行き過ぎ

ある部落である若干の農家が2・4・Dを使つてたまたまうまく行つた。ある家で台所改善をしてタイル張りの見事な台所ができた。こういうことになる2・4・Dを使うにも田の水が自由にならないのでできない家も、又タイル張りの台所を造るよりも便所の手洗いを一つ作る方が先だというような家も、「よしわしらの家も」ということで模倣(imitation)して——深く省みて自分の條件を勘案することなしに——それを取り入れる。普及事業のモデル村といわれて部落挙つて改良台所をもつてるといわれるようなばあいには、往々にしてこういう実際の過程と結果とが見られ易い。「實際の必要」以上に立派になつてしまうのが多いのだ。

機械化が進行するばあいに、部落とびとびにその條件に適う規模と資力と土地条件などを備えた農家がてんでに先

だつて行うのではなくて、むしろそれが「部落」の範囲で、あるいは協同の形でなされることが多いのは、ある程度かかる事情が伏在している証拠となるであらう。部落が模倣という社会過程が起るところの社会的単位をなしている。こうなるについてはもちろん農村社会の未分化、従つて個性化 (Individualisierung) が行われていないために部落社会 (共同体) の行為基準 (behavior pattern) が一たん作り出されるとそれはそのまま全ての人々を支配する、——個性をもつてそれに抵抗することが少い——という根本的な事情に由来するのである。このような状態のなかで「何、わしの家はわしの家のくらし向きの上からみてあんなものは要らない。板の風呂場で沢山だ、その金で便所の改造をした方が余程全体としてはよい」といい切つてミエを捨てる農家を期待するのは、ちやうど俗世に聖人たることを期待するように難かしいにちがいない。

こうしてせつかく万余の貴重な金を投じて購入した新式農具が風雨にさらされて錆び、タイル張り台所で料理するものが味噌汁タクアンに止まるという事態が生じ、しかもこの反省がなされていないということになる。

機械化が部落毎にかたまつて入つていくという事実はわれわれのしばしば観察するところであるが、統計数字的にこれを確かめる調査はいまのところない。ただ営農改善課の調査『動力耕耘機ハンドトラクター普及状況』(昭、二六、八月刊)は市町村別にトラクター、耕耘機の普及台数を調べてあるのである程度以上の事情を裏付ける数字になりうると思われる。即ち、昭和二六年前後に、全国で市町村の数は一〇、五〇一あるが、耕耘機の普及台数別にみると、このうちで

五台未満の市町村数……………一、五九〇

六～一〇台……………

一六五

(註) 未報告、不明の府県若干あるのを除いた数字、

一一～二〇台……………

一一六

また、調査期は若干各府県でばらばらである。

二〇台以上……………

一〇二

つまり、全国の約一九%の市町村にかたよつて一三、六〇七台の耕耘機が入つてゐるのである。もちろんこれは自然的技術的或いは経済的條件が揃つてゐるところに限られてゐる所以もあるが、上述のような理由も重なつてゐるであらう。

吉岡金市氏も興除村のなかに水稻直播農法が普及して行つたときに、上表の如く部落毎に大きな差があることに注目され、それは水利関係などという技術條件ではなくて「新しい技術の指導実験農家の所在部落から順次に他部落へ普及してゆくという過程をたどつてゐるからである」と説明し、「ここに技術指導の組織と方法の主要な問題があるのである」と指摘した。

直播栽培の興除村内への普及状況 (%)
(1)

大字名 普及率 (2)	西 疇	曾 根	中 疇	内 尾	東 疇	平 均
昭和21	31.0	32.0	1.2	1.5	1.0	10.6
22	66.9	40.9	5.6	4.3	3.4	17.9

(1)興除村農業会を通じて調査したもの。西疇、曾根と他の部落との差に注目せよ。(2)各部落の全水田面積に対する直播面積の割合。(吉岡稿、『直播機械化経営に関する調査』営農改善資料第9号、昭26, 8 P.41)

新潟県の平場地方では二、六戸に一台の割合でモーターが普及してゐるが、——これは秋雨が多いという天氣の關係で脱穀作業を早く済ませねばならぬとか、早場米を早くなるべく多量に出して割合よい収入を得たいとか、などの他の理由もあるけれども——その一つの事情は、「モーターもないようなところには可哀そうで娘を嫁にやれない」という pattern があるからだといわれる。この場合にはモーターはもちろん脱穀調製作業の労力を軽くして嫁入つた娘の疲労を少しでも軽くし度いという親の愛情もあるが、それより「モーターもないような」貧乏たらしい家には嫁にやれぬという氣持が強いのであらう。

なお品種の普及のばあいにもそうである。近藤教授は『日本農業経済論』のなかで(三二九頁)陸羽一三三号がその適地でないといふところまでムリに普及した結果、却つて凶

作の害を著しくしている事例をとりあげて分析され、これは東北の農民に資本力が弱く、短期間の品種の成果のみにしか注目できないからだと云われ、さらに「農民の間に品種選択に対する科学的批判力がないため合理性を越えてある品種が普及せしめられる」結果だとしておられる。しかしこういう説明のみにては、何故にA部落に陸羽一二三号が過大に導入され、相隣れるB部落にはそれ程でもなく比較的に合理的な程度に止まつたか、——仮りにA、B両部落の経済的條件に著しい差なしとすれば——は説明できない。そのばあい例えばB部落には良いリーダーがあつて、その危険を予め警告し一般の農民がムヤミな模倣をつつしんだということがあつて、始めてこれが説明され得るであらう。このように普及の機構の説明にあたつては、品種に限らず何事につけても経済條件と社会的條件とを両つながら視点として忘れてはならぬと思われる。

なお、品種のかような普及機構については、拙編著『農業の改良普及に関する文献・資料・その解説』の五七頁、匿名の普及(anonymous extension)の項、並びにアイオア州におけるトモロシンの交雑品種普及に関する調査において、部落農民(neighborhood)の影響を明らかにした文献の紹介(同書、一一七—一九頁)、を参照せられたし。又近時我国においてもかかる調査がなされた。(参照…新潟県農業改良課、「新品種の普及過程に関する調査」プリント刷、昭和二六年八月)

生活財についても同様であらう。調査はないけれども、私の聴取による経験では、ミシン、ラジオなどの戦後の急速な普及は、かかる模倣現象の有力なあらわれの一つのように入る。

(3) 農民の依頼心を加増する　いままでの段階においてはまず普及員は信用を得なければならなかつたわけで、とにかく何か尋ねられたら答えねばならない。こうしているうちに普及員は村ではなくてはならない人になつたし、村長や協同組合長にとつては普及員は便利この上もない存在であるということになつた。しかしこれでは普及員も忙しくてたまらないし何でも請負わねばならぬ便利屋のようなものになり了てしまふ。悪くすると地主や旧農会の技術員に代わる新時代のボスともなり兼ねない。「いい種子を世話してくれよ」、「よしきた」。「消毒薬を安くあつせんして

くれ」「よし来た」。「何かもうかる換金作物はないかね」……等々の如し。これだけならまだいい。一そう悪いことはこうすることによつて普及事業がその本来の使命としてゐるところの「新らしい自主的な農民を育てる」という目標が逆さまになつてしまふということだ。つまり自分たちは何も知らなくても考えなくてもいい、その方は全部あの専門家に任せておけばうまくやつてくれるという態度と空気が一般的になるということである。私が静岡県のある村に行つて普及員と農民との部落座談会を傍聴させてもらつたときの話であるが、「麦の病害が出たようだが、こうこうという状態になつてゐる。何うしたらいいのかね」から始つて雑多な質問があちこちから出される。普及員はそれに対して驚く程の博識ぶり——恐らく大学の教授でもあれ程速かに答へ得ないであろうと想われる程の——を發揮してその質問を快刀乱麻を断つが如く処理して行く。私たちは聽いていて実に驚嘆させられたのであるがそのあとである一人の農民が私に語つた一ことの言葉は、私に深い反省を喚び起したのであつた。それは「Nさんのような立派な腕のある普及員がいてくれると全く有難い。実は生じつか本なんかひっくり返して調べるよりもすぐ廻つてくるNさんに尋ねる方が手つとり早くてしかもまちがいがいいのですよ。私は此頃雑誌や本などを見る必要がないのでやめました」と。

つまり普及員の一年の懸命な活動の成果は美事に実を結んで農民の頭の中の考える大脳小脳の部分をも無用の長物化せしめたというわけである。「考える普及員、考えない農民」という美事なバッテリーの形成という事実は美事と云えば余りに美事な成果ではあるが、一方これが普及事業本来の目標からみると全く逆な目標を達成したということに他ならない。「善をなさんとして惡をなす」とは昔からよく云われる言葉であるが、こうした事実をよく反省してみると皮肉なことには——その普及員が良心的熱心であればある程——普及員活動の成果においてよくあてはまるように

想われるのである。

以上要するに普及事業の及んだ針の先きが錯雑した農民の生産或いは生活の根源的部分 (integrated system) に達しなかつたために、普及員—農民との接觸の仕方が極めて皮相的であつて (real な social crossing にならぬ) このために農民の個性化の過程は一向に進展せず、自ら選び立つ、考える農民たちの姿というものがますます没してしまふということの意味するであろう。このことを普及事業の側面に則して言えば、いつ迄もモデル村だけに止つてそのなかから農業近代化或いは生活改善運動という運動がもり上つてこない、ということであるし、普及員の側から云えばいつ迄も農業技師や品種伝達業者、左官や洋裁師の域 (つまり技術者) を脱することができないで、本来の意味での普及員の機能が発揮できないということの意味するであろう。学校はでき、生徒も一おう集つたけれども、ほんとうの教育は全然行われていないところである。

極言することを許されるならば、旧代の農会の技術員は主として補助金という綱を頼りにして農民をひきよせ、彼らの魂を奪つた。—依頼心のある非自主的人間に仕上げた。普及事業における普及員のばあいは補助金を有たなかつたけれども、彼のもつ腕—技術と人柄によつて農民を誘ひ寄せ同じく彼らの魂を奪つた。—少くともその結果からみると、こう云えるのではなからうか。そしてここで注意したいことは、かかる結末が普及事業第一期の活動そのものの中から必然的に、いわばやむを得ざる悪として生じてきたと言う認識、これである。

課題と方向

上に考えてきたように今日の普及事業の行き詰まりを見詰めてみると、ここから自らにして次の課題と方向とが考え出されてくると思われる。つまりそれは普及員と農民とが眞に農民生活生産の *integrated system* の眞中で手を握りあい語り合うということに他ならないのだ。

具体的に云おう。そのためには凡そ次のような方法が考えられるし、又これらの或部分は現に普及員の実践のなかで行われていることである。

(1) **基幹部分を揺がすものを普及の内容とする**

生産、生活の基幹部分に触れるものに入つてゆく。いままでは——静岡県の普及員の方の表現をかりると——循環論法で春には種子の話、夏には肥料の話、秋には收穫物の処理……というようにきまつた問題をくり返す。これでは毎年々々変わりつこない。けれどもこんどは「お料理」「種子の話」の如き、初めに学校開設用の手段に用いられたものは、逆にそれが故に普及の内容としては一ばん適當でない、ということになる。

そうではなくて今度は例えば土地改良の実践へ。そしてそれをもとにして交換分合↓畜力化↓……というように發展する。風は雨を喚び、雨は嵐をさそう……という具合に。ここに慣行の循環が切斷されて「新しい」何ものかがつけ加えられ、これがもとなつて数百年間の村の永劫回帰の運動が一新するというわけだ。生活改善のばあいには、例えばナガシヤカマドを直すことでなく台所を働らきよいムダのない台所と用具の配置に、さらに住居とその使い方の改善へ……の如し。

ここで注意すべきことが起る。それは従来のようにたんに *integrated system* から切り離れた個々の技術の断片を内容として普及を行つていたときには技術だけで一おう済んだわけであるが、今度のばあいは、事はその社会全体

にからまつてくる、従つて決して今まで程に容易に事が運ばないであろうという点である。即ちいまは integrated system 全体が揺り動かされる、資金も要る、従つて他人との關係が必然的に生じてくる。例えば資金の借り先、交換分合、土地改良のときなどの自分の田と隣りの田との關係、台所を改善するために相当量の材木のような物財が要る、等々。

(註) これらの点についてのくわしい説明は重要であるが、いまは省略する。下記論稿を参照せよ。

内山 稿…書評「生活改良普及員活動事例集」(農業総合研究、六の三、昭二七年七月刊)

同 …「農業診断学確立のために」(新しい農業、昭二五年一〇月号)

内山編著…『農業の改良普及に関する文献・資料・その解説』(昭二五、一〇月)

こうなつてくると問題がたんに断片的な技術の領域だけではとうてい及びもつかない。経営經濟、さらに社会の知識見識と手腕とをもたなくては仕事は一步も進まなくなるといふわけである。ここにおいて個々の生活問題、技術問題が改めて広い社会の場のなかで見直されるキッカケが生れると云つてよい。

生活改善のばあいには生産の場面に比較してこうゆう要求は比較的輕いのではないかと考えられる。というのは生活は凡てほとんど各世帯単位で行われるからである。共同の moment がない。又婦人は家に入つてしまうと、經濟・社会的に広く見るといふ習慣と力とを忘れてしまうから、主体的にもより困難ではなからうか。又生活の構造の研究が進んでいないから、例えば農業技術の場面のうちに、「土地改良」というようなキメ手が、生活の場面には発見されていないということもある。

私の知る限りでも進んだ地域ではこのような方向が実に着実に着想せられ又実施に移つているところもあるが、このことは既にアメリカの Extension Work がいま着々実行に移している如くである。すなわちアメリカでも初めは生産技術の普及が中心であつたが、農業恐慌などの時期を機会に農産物の販売取引の問題が起り、これからさらに農業經

済、すすんで政治問題にまで到る社会的普及が行われるようになったという。一方では農業はたんに農産生産や技術の問題たるに止まらず、それは生活の仕方 (a way of life) である。従つてよき農業は同時に又よき農村生活を意味すべきだという考え方があらわれてきて、生活改善事業の部門と農業普及事業一般部門との協同が実を結び始めた。

「家政普及でも初めは衣食住家事というような個々の ^{サブゼクトマター} 主題を中心にしてきたが、これは人、家庭、家の生活を一そう高めるための一つの技術に過ぎぬことがはつきりしてきた。そこから子供の事、子供生活指導、^{ガイダンス} 児童心理、同時に家族関係への問題が發展して結局次のことに氣付いた。すなわち、個々人も家族も決して空っぽの社会 (social vacuum) のなかに生きているのではなくて、彼らはその生きている社会の産物であり、^{プロダクト} 従つてそれが最もよく伸びるためには彼ら自らが村の諸條件と制度とに関与せねばならないということがこれであつた。こうして村の公の問題 (civic problems) や衛生、リクリエーション等々への関心が盛り上つてきた」 (D. Sanderson : Rural Sociology and Rural Social Organization 1942, p. 414 ff.)

このようにして普及事業の内容のなかに著しく社会的なニュアンス (色合い) が加わり全体の軸となつて行く、という点は注目されるべき方向であらう。

この方向に押し進めるばあい具体的に注意せねばならぬことは徐々に旧来の線に沿ひ乍らこれを正してゆくという方針、それともう一つは、條件のある程度の成熟の見透しの上に立つて仕事を進めるということである。急激にやれば学校にいやいややつとでできた生徒たちを又散らしてしまうことにもなり兼ねない。こういう実話がある。静岡のある地方で結婚式の翌日に人どにんびとVといつて近所の人などを招んで祝宴をはる行事があるが、簡素化しようというのでその時には女の人だけを招ぶことにした。こうして自然のうちに酒のない人どにんびとVがなされるようになったと云う。これに対してある家では同じく簡素化の方針だと云つて人どにんびとVをお茶とお菓子の会にした。ところがその前日の結婚式は町で酒入りで大さわぎをしたということが判つてしまったので、「あの家はケチなやつ

だ。おれの家のときには酒をうんと呑んでくせに、自分の方のときには酒を一滴も出さないとは」というので物言いがついたということだ。

以上の方向はとりも直さず普及事業四年の成果に他ならないのであるが、ここを突破するためにはなお若干の準備が要るであろう。その一つは普及員の教養の問題である。個々の技術をそれとして教えられ、それを農民経営のなかの一つの環として取扱うことを教えられていない普及員を、或いは——同じことであるが——カステラの作り方、染物の仕方という断片的手先技術しか教えられていない生活改良普及員を、このぶつかつた問題の場面から更めて再訓練することである。経済学社会学のような基礎的教養とそれを農民生産生活の実さいに即して駆使できる能力——それに依つてかの断片的知識技術が生かされてくるところの——とが養われなくてはならないであろう。このことはアメリカのように永い普及事業の経験をもっているところでも此頃やつと気付いたようである。^(註)

(註) L. D. Kelsey & C. C. Hearne : Cooperative Extension Work, p. 75 以下、U. S. D. A. & Association of Land-Grant Colleges and Universities: Joint Committee Report on Extension Programs, Policies and Goals, 1948. なお生活改善普及員について U. S. D. A. : Home Demonstration Agent, P. 38

第二にはこういう方向にまつしぐらにつき進んで行くことは必らずしも政府の行政的なワクからは望まれないと云うことである。即ち問題をおし包んでいる経済的社会的條件のもとをたどつて行く努力を徹底させて行くならば、それは一方で強く政治行政の障碍とその批判につき当らざるを得ないからである。だから仮りに第一線の普及員たちが現実の問題に迫られて解決の糸口をここまで伸ばし求めて行くとしても、中央の当事者になればなる程その追求の手を避けねばならぬというジレンマに陥ることは必すだからである。社会的政治的にこの問題をおし進めることは中

普及方法の種別による普及効果
(あらわした普及効果 100%合計のうち)

普及方法種別	実行に移された場合(%)
普及員が直接接して話したとき	34.9
隣人其他による影響	23.3
物による方法 (展示など)	23.0
書きものによる方法	18.8

中央政治行政の当事者にとつてはむしろ双（おも）に自れに向けることを意味するかもしれないからである。このことは普及事業そのものが現実におかれてゐる社会経済制度のワクのなかで本来的に内包してゐるジレンマがたまたま表出することに他ならないが、こういう筋途を意識無意識のうちに感得するならば、この方向を逸らそうと努めるであろう。この事情のなかに上に示唆した方向への進行が紛らわされ行き悩みに陥るであろうことは十分予想できるところだ。

(2) 方法としての個人接触

部落座談会で多勢集つて話をするときにはどうしても全般に通ずること、つまり各個々の事情には目を向けないで、そういう点では integrated system の中に入りこまないところの話しかできない。

接触の仕方でもどうしても通り一ぺんになり勝ちである。これを打ち破るためには強烈な個人対個人の打つかり合いがなされなくてはならぬ。昔から教えを伝えるのは「師資伝承」という言葉の通り師一人と弟子一人との間でなくてはならないといわれている。もし農民の基本的回心と自覚とを求めるならばどうしても、一個の人間としての普及員対一個の人間としての農民というその緊迫したやりとりの場面のなかでのみ期待できるであろう。

個人的に接触する方法がいかに力強い効果をあらわすかに就いての実証的データはわが国には未だないが、上図はアメリカで調査されたものである。(C. B. Smith: Agricultural Extension System in the United States. p. 260) なお、同様な表は Kelsey & Hearne: Cooperative Extension Work, p. 234 (訳本 下巻六頁) にも掲げられてゐる。

もちろんここでは個々の事情が深く考慮に入れられる。

姑さんの強力な家で嫁さんの進んだ意見がとり入れられ難い家ではそれなりに、親父が頑固で息子の気持を伸ばすのをじやましてゐる家ではそのように、資金がなくてせつかくの熱心な希望がそのまま押しつぶされている家ではそれを救う方向に、……というように、その個々のやりとりの内で深刻なつき合い関係と交流 (soziale Kreuzung) が行われる。反対、同化、順応の過程、そしてこれを通じてのみ、始めて目指す考える農民、個性的農民が誕生しうるのである。^(註)

^(註) 社会学者ジムメルはかつて人間を個性化せしめる如き結合 (Kombination) は次のようなことによつて無限の可能性をもつようになると論じた。

「個々人がさまざまの社会圏 (Kreisen) に所属し、そのなかで競争 (Konkurrenz) と協同 (Zusammenschluss) との関係はげしく交替する如きばあいがある。このような互に相反する二つの方向に向うところの人間の本能的欲求がここにおいて余すところなく發揮せられ、彼は他者と協同しながらなお相反する行為をとり考え方をしようとする。このような愛憎の揺れ動く一定の巾 (広がり) とその割合 ^{プロポーション}こそは (それはたとえ具体的にはさまざまな内容によつて充たされているとしても) 人間にとつては一つの純粹に形式的な宿命、避け難きもの (Notwendigkeit) なのである。

否むしろある一定の生の内容の把握は決してその実体 (質) 的 (sachlich) な意味にもとずいてとらえられるのではなく、ただこの生の内容に伴つてゐるところの彼の形式的な衝動が満足するか否かによつてのみなされるとちや言つてよい。個性 (Individualität) の特長を表示するものは、——それを自然的行動 (natürliches Streben) という観点から見ても歴史的生成物という観点から見ても同じく、——それが決定的に協同と競争との間のどの尺度のところにあるかということであろう。」 (G. Simmel: Soziologie, S. 321)

けれどもこのためには永い期間とあわてないあせらない勇氣と地道な熱意とが要求される。もしも普及員が自分の予め描いていた改良計画を性急に押しつけるならば失敗である。相手の出方を見てそれが仮りに貧しくせまく、自分のプランとは喰い違つていようと時間も時間をかけてじっくり協議し、納得の行く迄話し合う。彼に己れを盡くさしめることが肝要であろう。「木を伐る都合もある、予算の範囲もある、大工さんの意見もこうこうだ、農繁期にかかると困るから早くしてくれ……」というように合所改善のプランを決定するように迫られても、決して急いではダメだとはある優れた生活改良普及員の経験である。^(註)

^(註) この点からみると、いわゆる普及効果の測定という課題は——たとえそれが行政的に要求されるとしても——甚だよくない効果を生んでいる。とにかく、何個カマドを築いた、四日クラブを何回やつて何組作つた、というような表面的な数字を要求されるのでは、こういう落着いた仕事はでき難いからである。

あるいは、「これはこうです」と一ぺんに教えることをせず、ある時にはつっぱねてみたり、或いは実際に経験させ乍ら自ら納得させてから実行させて行くためには時間と根氣とが要することは自明の理であろう。

(3) なかまグループの自動活動 普及員学校ができたならできるだけ速かにこれをいわば「生徒自治会」の結成にまでもつてゆくことである。こうすることは一つには、人間は強いグループに入つたときのみ——旧来の家族集團等との交錯によつて——力づく矛盾を自覺し自己改革を実現しうるからであり、第二にはなかまリーダーが最もよい指導者であるからである。⁽¹⁾即ちこのばあいには普及員はたんに傍にいる助言者(adviser)たる位置に止まるのである。⁽²⁾早く優れたなかまリーダーを発見しこれを伸ばすことによつて自らはリーダーたる位置から退くことが大切である。

この点に關してわれわれに深い示唆を与えるのはアメリカの近代 Extension Work 発端の事情であらう。二〇世紀の初め頃合衆国南部の棉作地帯に棉の害虫（ゾービ虫）がひどく発生し棉作は絶滅に瀕した。その時有名な Dr. Knapp は大学で発見したその害虫駆除法を最も急速に広めることを計画したのであつたが、その方法というのは最初は農家と離して別に展示圃（demonstration farm）を設けて實際にその効果をやつて見せて納得させるということだつた。ところがこの方法はなかなかうまく行かない。そこで今度はとくに熱心な農家を選びこの農家自身の農場で展示することにして、これをときどき技術者が巡回して指導することにした。この結果は大成功で農家は自分たちの仲間の農場ではつきりとその駆除法の効果を見せつけられたことによつて、直ちにそれを確認し模倣したのであつた。のちこの方法が実地展示（result demonstration）、方法展示（method demonstration）という普及事業の根幹をなす方法の発端となつたと同時に、——このばあいについて注意することは——、この展示者（demonstrator）が仲間のなかから選ばれたばあいに最も効果的であつたことが発見されて、この展示者を demonstrator あるいは Key-man（鍵になる人）——つまり技術者と一般農家との間の鍵になつて新技術を広める役割を果すという意味で——又は篤志指導者（volunteer leader）——普及員や技術者の如く官から給料をもらわないで民間のまま無料でいわば名誉職としてその役割を果すという意味——と称し、またこれらの農民が示した範例（モデル）に従つて新しい農法を実施するものを協力者（cooperator）という。一方このような村の農民の間を巡る巡回技術者を Agricultural Agent（農業普及員）とする、いわば今日のエクステンション・ウォークの基礎を生むに至つたのである。つまり Extension Work 創出の発端におつたその一つの大切な支柱として同時に仲間リーダーの重要性と役割とが発見されたというこの事實は、なかなか示唆深いところべきであらう。

この間のくわしい事情は、トルー著、吉武訳、『エクステンション・ウォークの歴史』（本所刊）、D. Sanderson: ibid., p. 404. 或いは、内山編著、『農業改良普及に関する文献・資料・その解説』一六頁を参照せられ度し。

古来、師が偉大ならば偉大なるほど弟子は不肖の弟子となり易いといわれているが、これはいつ迄もそびえ立つ師に依拠せざるを得ないからであろう。そして農民と普及員との間の距りは恐らく多くのばあい、偉大な師と弟子との間のそれほどあるにちがいないから、このパラドックスの危険が発生し易いであろう。

ここで、「職業的指導者は自ら事をなすべからず」という Lindeman の言葉が想い起されねばならぬ。ソクラテースのアポリヤを用いる産婆術という教育方法、日本ではまず、二宮尊徳の用いた方法——例えば金を借りに来たものに向つて、初めは不心得をきつくさとして貸さずに帰えす、そのあとでそつと弟子に裏口から金をとどけさせるという方法など——は参考になるのではなからうか。

さきに用いた言い草を逆用すれば「悪をなさんとしていつも善をなす」というメフィストフェレスのやり方が考えられるのである。もちろんこれは究極的に達人の芸であるといわねばならないであろうが。

(註) (1) 清水幾太郎氏の調査せられたところに依つて、とくに青年たちにとつては彼らに影響をもつ指導者は同じぐらの年輩のものが多く一つの特徴だということが解つた。従つて「青年期にあつては同年齢の人間の信頼と結合とが甚だ顯著であつて、このことは青年団風の社会教育方式が依然として有効であることを示すものである」。 (清水幾太郎稿、農村教育、農業総合研究、三の三、昭和二四年七月)

(2) 普及員の活動する時間と労力とを節約するという意味でのみ、もし篤志指導者 (Volunteer) 或は Key-Man と Demonstrator というものをとらえたならば、即ち、たんなる普及員の助手として彼をとらえたならば、上に指示した Volunteer の本質的機能を失つてしまふ。逆なのだ。Volunteer が主人で Agent は助手と云つた方がむしろこのばあひの事態にあてはまる。

(4) チェック・シートのばあい——自己発案の一つの工夫—— あれだけ発展したアメリカの普及事業のばあいは

それだけに依頼心を惹き起す処も多いはずであろう。そこで考案されたのがこのチェックシートである。つまり台所改善なら台所改善でそれに伴う integrated conditions (からみ合つた諸條件) を総て、例えば水はけ、水のあり場所、高さ、……というようにあげて、それぞれの條件を農民自らをしてチェックさせてみる。そのためのチェック・シートがこれである。これだけでは足りないので別にハンドブック(手引書)があつて夫々の項目について詳細な手引きがのべてある。チェックをしながらこのハンドブックを読んでゆけば自然と自分の力である程度の計画がうまく樹てられるようにできているわけだ。実際には普及員に尋ねることも恐らく多いであろうが、少くとも総てを依頼するのでなく、自ら学ぶ過程が中心におかれていることが大きな意味をもっている。(バランスト・フアーミング運動で実際に使われている)。

こういうことが比較的かんたんにできるような技術的な工夫も忘るべからざることであろう。

〔あとがき〕 普及員の方々の苦心談をききながら、私のメモに記されたことを整理したが、以上のとおりであつた。いま普及事業の根本的な規定——補助金行政に編入するか否か、普及組織を政府から協同組合、或いは他の組織体に委任するか否か等々の——に向つて多くの論議が重ねられているようであるが、これらはまず、現に行われている普及活動の科学的な分析と評価とを問題の視点に立つて行うことから、それを出発点としてなさるべきであろう。三年四年の普及活動の成果は、その答を提供するに恐らく十分である程に成長していると思うからである。未完稿のメモのまま本稿を発表したのも一つはかかる気持からであつた。